

参加隊員より一言！

取材同行記



取材担当 小倉

第3回地球環境貢献特別プログラムの取材に同行したibm.comセンター事業部.EWMの小倉です。

植林についてはこちらや隊員の感想をご覧くださいとして、ここでは植林以外のタイの魅力やプログラムの様子をレポートしたいと思います。

毎年財団法人オイスカのスタッフ・現地のボランティアの方々が、植林作業だけではわからないタイの魅力に参加者に理解してほしいと、何ヶ月も前から準備してプログラム内容にさまざまな工夫を凝らしてくれています。そのおかげで私たちは日本では絶対に体験できないさまざまな思い出と共に、充実した日々を過ごすことができました(植林だけだったら、辛くて大変だったという記憶しか残らなかったかも・・・)。オイスカの春日さん、田野井さん、アイサさん、エイクさん、ニッドさん、アリさん、チャチャワンさん、看護婦のケイさん、スワニーさん、ラノーンのカヤイさん、パンロップさん、ナティーさん、ティムさん、その他関係された全ての方々に改めて感謝したいと思います。

タイについて

成田からバンコク国際空港までは距離にして2868マイル(4615km)、飛行機で約5時間ですから、ハワイよりだいぶ近いです。機内食を食べて映画を2本見ると到着！タイと日本の時差は2時間で時差ぼけは殆どありません。今回利用したのは、行きが成田18:15発・バンコク22:30着、帰りはバンコク23:50発・成田07:55着の全日空便です。この時間帯の便が多少安くなるそうです。タイの季節は夏季(2月～5月)・雨季(6月～10月)・冬季(11月～2月)の三つで、今は雨季にあたり、激しいスコールがあるため雨具は必須です。一番観光に適しているのは冬だそうです。ラノーン初日の夜だけは道路が川になるほどの豪雨でしたが、他の日は降ってもシャワー程度で、今回のプログラムは非常に天候に恵まれました(おかげで皆真っ黒です)。タイの通貨単位はバーツ(BHT)で、1バーツが約3円ですから、買い物時などは3倍すれば円での値段になり、非常にわかりやすいです。日本で換金するよりも、タイの空港や銀行で換金したほうがレートはいいようです。タイの物価は日本に比べれば非常に安いといえるでしょう。特に生鮮食品はびっくりするほど安いと感じました。1週間で5千円もあれば食事や飲み物には十分ではないでしょうか。最終日に出国税500バーツが必要なため、その分だけは別にしておいたほうがよいでしょう。

タイ語について

一週間の滞在では、とてもペラペラのレベルまではいきません。私は次の言葉だけなんとか乗り切りました。

- サワディークラッ(おはよう、こんにちは、こんばんは) 口の前で両手を合わせて、取り合えずなんでも挨拶はこの言葉です
- コックン・クラッ(ありがとう) ついついサンキューといってしまう自分が情けない・・・
- ポン・チュー○○(わたしは○○です) 自己紹介する機会は何度かありました、これ以外は通訳をお願いしましたが
- ヌン・ソーン・サーム(1、2、3) シャッターを押すときの合言葉、滞在中一番使った言葉かもしれない
- アロイ(おいしい) この言葉も連発しまくりでした
- チャイヨー(乾杯) 正式には3回繰り返すようです

オイスカの日本人スタッフの方は、現地の方とタイ語で普通に話しています。どうやって習得したのでしょうか？

最初からハブニング？

バンコクからラノーンに向かう国内線でのことでした。飛行時間の半分を少し過ぎたあたりで突然飛行機がUターン。タイ語でアナウンスがありましたが、私たち日本人は何事起きたのかかわからず茫然としていると、日本語も話せるタイの参加者が「急病人が出たのでバンコク国際空港に引き返すらしい」と教えてくれました。バンコク空港に着くと救急車が待機しており、その場で心臓マッサージが始まり、一同びっくり。1時間ほど

空港待合室で待機した後に出発、ラノーには2時間遅れで到着しました。ラノー空港についてみると、空港建物以外に周りには全く何もなく、飛行機が引き返したのも納得できることです。オイスカの方々は、何も無い空港で2時間以上も待機してくださいました。予定していた船での島観光が間に合わなくなったため、ミャンマーとの国境が見渡せる高台のビューポイントに車で案内していただきました。



ラノー県について

植林を実施する ⇨ ラノー県はバンコクから568キロ、国内線（プーケットエア）で約1時間ほどかかります。着陸直前、眼下には濃い緑の森林地帯が広がっていて、何処に植林するところがあるのかと不思議にすら思いました。ラノーでの滞在ホテルは ⇨ ロイヤルプリンセスラノーで、ホテル内のプール横に水着で入れる温泉（どこからか運んでくるらしい）があり、植林作業の後に入ると、一日の疲れが癒される気がします。植林現場とホテルの間は、荷台に2列の座席があるソントオというトラックに揺られること30分以上。途中には有名なガオ滝があり、初日の植林の後にそこへ立ち寄る機会がありました。ラノー市街地近くにポーナムローン温泉があります。65°Cの源泉は熱くて触れませんが、コンクリート床下に温泉を這わせた床暖房式と足湯の施設がありました。ラノー名物はカシューナッツ、特に皮付きがお勧めだそうです。ラノー最終日に現地で有名なお店に立ち寄り、お土産として買いました（1袋500g入りで100バーツ、安い！）。



感動の自然体感Studyキャンプ！

植林2日目は午前中で終了し、午後からはキャンプに行くということだけを私たちは知らされてきました。着替えと洗面用具のみ携帯していざキャンプへ。ソントオに揺られ一時間ほど山中へ、草しか生えていない河原に到着。ここでキャンプなの？と思いきや、ライフジャケットを着用して5人乗りの船に分乗し、河の上流へ遡ること50分ほど、やっとキャンプ地「パト」に到着しました。そこは国立公園の中であって、電気もガスもなく、周りを見渡す限りのジャングル。宿営地だけはサッカーグラウンドほどの平らな草地になっており、その周りには椰子、ランブータン、パパイヤなどが自然に生っています。「もう少し上流に面白いところがあるから、泳げる格好で行きましょう」と言われ、全員でさらに100分ほど船で上流へ。そこで「さあみんな河に飛び込んで！」の一言。なんと先ほどのキャンプ地まで“河の流れに身をまかせ”ということなのでした。最初は「ウツソー」と思ったものの、やってみるとこれが意外と気持ちいいのです。ライフジャケットを着ているので溺れる心配はなく、流れるプールの大自然版といえわかりやすいでしょうか。途中流れが速くなっているところは浅瀬なので気をつけないと尾てい骨をしこたま強打します。流されること1時間あまり。こんな風に自然に身を任せただことは、いまだかつてない気持ちの良い経験でした。ガスも電気もないため、料理はすべて現地スタッフの方が薪だけで作ってくれました。特にタイ米をバナナの葉に包んで竹に入れ蒸し焼きにしたご飯は、タイ米なのにモチモチとした食感でとてもおいしかったです。

日が落ちるとキャンプファイヤーを囲んで、このキャンプ地の歴史や自然体感キャンプをする意味などを紹介していただきました。ふと周りを見ると、蛍が飛び回っています。これほどたくさんの蛍は日本ではなかなか見ることができないでしょう。翌日は竹製の筏で乗船地点まで下ります。定員は4人でそのほかに前と後ろに現地スタッフが竹の棒をもって筏をコントロールします。腰まで水につかる筏、船頭を体験させてもらったら岩にぶつかりそうになる筏、一部結わえた縄が解ける筏ありで、スリル迫力満点の2時間あまりでした。河下りの途中、岸辺に筏を止めての昼食、現地のおばさんからのマンゴスチンの差し入れ、とてもおいしかったです。



タイの食事情、果物は最高！

タイ料理というと、辛だけかと思っていたら甘いものは極端に甘く(ラノーン最終日の朝食口ティは、なんとコンデンスミルクをパンに付けて食べます)、ときには甘さと辛さが混じった味付けの料理もありました。暑いところの料理は味がはっきりする傾向があるのでしょうか？ ラノーン最終日の夜は、昨年と同様に林野庁職員宅に夕食を招待され、Farewell Party。この日ご馳走になった料理のなんとおいしかったことか、きっと日本人好みの辛さ控えめの味付けをしていただいたのでしょう。タイの果物は種類が豊富で新鮮です。特に一度食べたらとまらないのがロンコンとマンゴスチン。どちらも市場に行くと1kgで20～40パーツぐらいで売っています。スーツケース一杯買って帰ろうかと本気で悩みました。タイのおいしい食事と果物の結果、ご想像のとおり帰国後の私の体重は1kg増でした。



タイ最終日はバンコク観光、全身すっきりタイ式マッサージ！

タイの最終日はフライトが夜遅い便のため、日中はバンコクの市内観光ができました。まず午前中はバンコクの2大観光名所、エメラルド寺院&王宮、ワット・ポーを見学。午後はDuty Free Shopに行った後、タイ式マッサージ組と市内ブラブラ組に分かれました。私はタイ式マッサージを選んだのですが、2時間300パーツ、チップ込みでも400パーツと格安です。ただこの2時間が結構辛かった(「痛い」と言いそうな直前に止める絶妙のタイミング)なのですが、終わったあとは羽が生えたかのように体が軽くなりました。このマッサージを受けるだけでも、タイにいく価値があるかと思いました。タイでの最後の食事には、IBMタイから昨年参加したオイさん、リンさんがわざわざ足を運んでくれて、昨年と今年の植林の話で大いに盛り上がりました。食事の後は空港に直行。ここでまた思わぬ人が、日程の途中ご家族の急病で帰られたチャワリットさんがわざわざ見送りにきてくれました。しかもお土産までいただいて、一同恐縮です。

